

第2 教育研究団体の意見・評価

① 一般社団法人 情報処理学会

(代表者 萩谷 昌己 会員数 約20,900人)
TEL 03-3518-8374

1 前文

「令和8年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト出題教科・科目の出題方法等」において、『情報Ⅰ』は、「情報Ⅰ」の学習指導要領の内容を総合した出題範囲が試験時間60分配点100点で出題されることが示されている。また、「令和8年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」において、問題作成の基本的な考え方、構成・内容、分量・程度、表現・体裁や問題作成における配慮事項が示され、「情報Ⅰ」に関しては、「日常的な事象や社会的な事象などを情報とその結び付きとして捉え、情報と情報技術を活用した問題の発見・解決に向けて探究する活動の過程、及び情報社会と人との関わりを重視する」ことが明記されている。これらの方針は、令和7年度から変更されていない。

これらの方針に従い、第1問～第4問（全問必答）として出題された。2では、設問ごとに、評価結果を述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

試験問題の評価結果をそれぞれの設問ごとに述べる。

第1問 第1問は問1～問4の4問から成り、配点は20点である。解答欄は「ア」～「シ」（計12欄）である。うち問3bは二つ選択（「キ」・「ク」）を1項目として採点するため、採点項目は11で構成される。設問・解答群・図表や規則提示はおおむね見開き内で参照しやすい配置となっており、参照の往復を抑えた状態で解答しやすい。小問集合の形を取りつつ、情報の表現と処理に関する複数領域を横断的に確認する構成である。

本問全体は「情報を記号として表し、規則に従って扱う」という観点から整理できる。時刻をビット列で表す（問1a）、文字列中のパターンを記号に置換する（問2）、議事録の構造を行頭記号で表す（問3）、企画名を識別番号で参照する（問4c）と、題材は異なるが、いずれも記号化と規則に基づく処理の組合せとして整理できる。これにより受験者は、表現（記号化）と操作（規則に従う処理）と目的（圧縮、可読性の向上、集計の容易化）の関係を、問いをまたいで比較しやすい。

問1 主として概念理解を問うている。aでは、時（0～23）と分（0～59）の必要な値の数を根拠に、 n ビットで 2^n 通り表現できることを用いて必要ビット数の最小値を判断させる。単なる計算技能ではなく「必要な値の数→表現できる値の数→最小」という判断過程を踏めるかが焦点である。bは情報通信ネットワークに関する説明の選択であり、IPアドレスの一意性、LAN構成要素の役割、パケット交換の性質などで生じやすい誤概念を弁別し、仕組みとして整合する説明を選べるかを問うている。

問2 手続き理解・実行を測る問である。例示された特定の3文字パターンへの記号割当ての置換を手掛かりに、与えられた文字列へ規則を適用し、さらに別パターンへの記号割当てを追加して表現を更新する。ここでは、規則の適用単位の同定と、置換後の列に対して次の規則を逐次適用する処理を、取り違えずに追跡できるかが本質である。

問3 この問も表現規約の運用という手続き的側面が中心である。装飾機能が使えない環境で、

見出し・小見出し・箇条書き・補足・私的メモを行頭記号で区別する規則を読み取り、空欄に適切な記号を補う。加えて、議事録化（整形）時にどの要素を強調し、どの要素を抑えるかという装飾方針、及び階層構造を明確化するインデントを選択させることで、構造化から可視化までを一連の処理として確認している。

問4 データ活用に伴う判断を含む問である。住所の詳しさ（粒度）や年齢の丸めは、比較可能性と個人特定リスク低減の両立という観点からの選択である。表の統合では、列の意味を揃える前処理（年齢→年齢層、町名の削除、実施年の付与）を問う。さらに、企画一覧表（マスタ）を用いて企画名を識別番号で参照する利点を扱う。あわせて、識別番号は名義尺度であり、平均や標準偏差といった数値的操作の対象にならないというデータ型の理解を確認する。

以上より、第1問は、概念理解・手続き実行・判断という3水準を具体的な文脈の中で整合的に配置した設問群として整理できる。

第2問 本問は、独立した二つの中間AとBで構成されている。これらの問題に含まれる設問の多くは、基礎的な知識と思考力、及び計算力が問われるものである。問われている項目のいずれも、多くの教科書で取り上げられている語句・概念であり、教科書の内容をしっかりと学習し、さらに思考力も身につけた受験者にとっては、解きやすい良問であったと考えられる。以下、それぞれについて解説・分析を行う。

A SNSを利用する際の注意点に関する問題である。一般に、個人を特定されるような写真や発言の投稿は、身近の危険を増大させ、また映り込んだ他人のプライバシーを侵害する可能性がある。問1 **ア**：写真投稿の際に注意すべき点について問うている。選択肢には「拡散」「自宅特定」「位置情報」といった語句が並ぶ。安全面に配慮してSNSを利用している受験者ならば、迷わず解答できただろう。問2 **イ**：提示された画像を見て、侵害の可能性がある権利を選択させるもので、知識と判断力が問われる。問3 **ウ**～**カ**：断片的なSNSの発言を組み合わせ、個人を特定していくプロセスを理解しているかを問うている。問4 **キ**：写真から指紋を読み取る技術の背景を推理させる問題である。問5・問6 **ク** **ケ**：送信者不明のメッセージへの対応や、フィッシング詐欺、不正アクセス禁止法といったサイバーセキュリティの基礎知識とリスク管理能力が問われている。

B 動画のデジタル表現とデータ量に関する問題である。この種の計算問題では、「階調（色深度）、解像度、フレームレート（fps）、再生時間」、及び「単位（ビットかバイトか）」に注意して解答することが不可欠である。問1 **コ**・問2 **サ**・**シ**：fps（フレームレート）の定義と、動画のデータ量を求める計算式を正しく立てられるかを問うている。問3 **ス**～**タ**：動画の「フレーム間圧縮（差分を用いた圧縮）」の構造に関する設問である。1フレーム目（全体）と、それ以降の変化した箇所（差分）を記録する仕組みを理解している必要がある。問4～問6 **チ**～**テ**：データ量に配慮した動画編集（解像度やフレームレートの変更）や、音声データのサンプリング（標本化）の計算、動画共有技術の正誤について問うている。授業などで実際に動画を扱った経験があれば、より具体的にイメージしやすい設問であった。

第3問 本問はアルゴリズムとプログラムに関する理解力を問う問題である。各分野のクイズの問題を選択あるいは配分するという題材に関し、問1では手作業による実行を想定してその流れを正しく追えるかを問い、問2ではその処理の流れをプログラムとして表した形で正しく把握できるかを問うている。問3では問1と問2で用いたアルゴリズムを発展させたものをプログラムの形で正しく把握できるかを問うている。

試験問題の形式はおおむね適切であり良問であると考えられる。ただし、問2の後半及び問3における設問は、ほとんどがプログラム中に設けられた空欄を埋めるものを選ぶ問題であり、その中で唯一プログラム中のその部分の実行回数を問う設問**ケ**も、図4で値が2となっている配

列要素の個数だけから正解が容易に推測できてしまう問題となっていると考える。プログラムが正しく理解できている場合にのみ正解が求められるような設問が望まれる。

また、六つの分野ごとに各 5 問から成る 30 問のクイズ集を、問 3 では四つ作るとなっているが、もし用意された問題数が分野ごとに偏っていていずれかの分野で問題が $5 \times 4 = 20$ 問未満であると、30 問未満の回が生じることになる。前文などで、各分野で十分な問題数が用意されている旨を述べておくのが望ましい。

なお、本問題では配列の添字は 0 から始まっている。これは同年度の本試験や前年 2025 年度の本試験及び追・再試験の第 3 問では 1 から始まっているのとは異なっているが、試作問題等では 0 から始まる配列も前例があり、また一般には 0 から始めることが自然であるような状況も多い。このため、今後も同様に、問題中に明記して 0 から始まる配列も適宜用いてよいと考える。

設問数及び配点はおおむね適切である。ただし実質的に一つの細問である「コ」・「サ」が 4 点の配点になっているが、他の細問の配点と比べて考えると、これは 3 点とし代わりに「ク」の配点を 2 点から 3 点に増やすことも考えられる。

以下、問いごとに意見を述べる。

問 1 はアルゴリズムを文章で述べた上でその動作を正しく理解できるかを問う問題であり、冒頭の出題であることを考えるとおおむね良問であると言える。ただし、「集められた問題はデータベースに保存され」とあるが、データベースという語はその後、出現しない。学習指導要領では、データベースは「(4) 情報通信ネットワークとデータの活用」を中心に学ぶので、それに対する知識・理解が問われていると誤解されることを避けるために、この語を用いずに、「問題が 193 件あり 0~192 の通し番号をつけている」などの説明をすることも考えられる。

問 2 は「分野」を数値に置き換えることを問う比較的単純な問題のあとは、プログラムを示し空欄を正しく埋められるかを問い、最後に代入の回数を問う問題である。ただし上に述べたように、「ケ」についてはプログラムが正しく理解できている場合にのみ正解が求められるような問題に向けた工夫が望まれる。

問 3 はアルゴリズムをやや複雑なものにしそれをプログラムの形で示しそれが正しく理解できるかを、問 2 と同様に空欄を埋められるかで問う問題である。良問ではあるが問 2 での出題をそのままアルゴリズムだけ少し複雑にただけという印象もある。この問 3 の中で、上記の、プログラムを正しく理解できている場合にのみ正解できるような工夫の下、実行回数を問う問題を入れるのも一つの方法だったと考える。

第 4 問 花粉の飛散量を題材としたデータ活用に関する問題で、5 問で構成されている。問 1 は箱ひげ図の読み取り問題、問 2 は相関係数に関する問題、問 3 と問 4 は移動平均に関する問題、問 5 は散布図と回帰に関する問題となっている。情報処理学会で公開している情報科教科書用語リストによると、箱ひげ図、相関係数、散布図は半数以上の教科書に掲載されている用語であり、受験者は教科書で学習していれば十分に理解しているものと考えられる。回帰についても、回帰分析や線形回帰なども入れると半数以上の教科書に掲載されており、同様のことが言える。一方、移動平均は 1/3 ほどの教科書にしか掲載されておらず、問題文をしっかりと読んで理解をする能力が必要となる。学習の効果を測るとともに、その応用力も測ることができる、良い構成になっていると考える。

問 1 「ア」は箱ひげ図の読み方を理解しているかを問う問題であり、特に箱の真ん中の線の意味を知っている必要がある。知識を正しく使えることを問うている問題である。「イ」「ウ」は箱ひげ図から読み取ることができる値を具体的に示し、どの箱ひげを表しているかを問う問題である。こちらも「ア」と同様に箱ひげ図の構造に関する知識を問うている。問題としては知識を

問うている側面が大きく、十分に教科書を理解しており、落ち着いて答えることができれば得点できる問題であろう。

問2 **工**は相関係数の正負の意味を理解できるかを問うている問題である。相関係数の基本的な問題であり、こちらも教科書の内容を把握していれば問題なく得点できる問題である。

問3 移動平均に関する問題であり、移動平均について説明されていない教科書も多くあり、問題を読んでまず移動平均を十分に理解する必要がある、読解力が試される問題である。**オ**は移動平均を計算した結果を想像して、幅が広くなれば変化が緩やかになることを理解する必要がある。移動平均の理解、結果の想像という二つの段階を必要としており、高い思考力を問うている問題であると考えられる。一方**カ****キ**については、単純に幅を問うている問題であり、移動平均の意味さえ理解していれば答えられるため**オ**に比べれば格段に易しい問題である。問題には「6～7月の各日における…」とあるにもかかわらず、読み取りには6月のみのグラフを示していることには違和感がある。

問4 相関係数と移動平均に関する問題である。**ク****ケ**は相関という言葉や相関係数の意味を知っていれば簡単に解ける問題である。一方**コ**は、問3の移動平均の説明を十分に理解して使いこなさなければならず、高度な理解を求める問題となっている。ただし図2では、グラフから正確な数値（日付）を読み取ることが若干難しかったり、最大値が2点あるデータがあったりして、戸惑う受験者もいるのではないかと考えられる。

問5 散布図と回帰直線による予測に関する問題である。**ク****ケ**が引用されているが、これらが正解していなくても解ける問題となっている。**サ**は回帰直線の方程式の意味を知っていれば、多少面倒ではあるが単純な計算で求められる問題である。**シ**についても同様のことが言える。

3 総評・まとめ

『情報Ⅰ』の受験者305,779人で、その内の577名が追・再試験を受験した。「情報Ⅰ」の幅広い領域から、「社会や身近な生活の中の題材、及び受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事例や事象について、情報社会と人との関わりや情報の科学的な理解を基に考察する力を問う問題」や「問題の発見・解決に向けて考察する力を問う問題」が、どの教科書で学んでも取り組めるよう配慮して出題されており、適切な出題であったと言える。第2問Aでは、「情報社会の問題解決」から出題されており、「情報Ⅰ」の幅広い領域から中間・大問が出題されるのは望ましい。実際の平均点などは分からないが、本試験と比べると難易度は低いと判断している。今後は、本試験と同程度の難易度となることを期待している。

『情報Ⅰ』の問題作成の方針は令和7年度から変更なく、追・再試験の大問構成も昨年度と同様であったため、多くの受験者が戸惑うことはなく取り組めたものと考えられる。一方、問題量はやや増えており、受験者の解答時間を考慮すると、分量は昨年度程度が望ましい。問題中のプログラム表記は、特定のプログラミング言語ではなく受験者が初見でも理解できる共通テスト用プログラム表記が用いられており、授業で学んだプログラミング言語による有利不利が出ないように配慮されている。この方針は今後も継続されることが望ましい。

共通テストの出題形式・解答形式の制約の中、実習を通じて体験的に理解しているだけでなく、それらを整理し、情報と情報技術を活用した問題の発見・解決につなげる力を問う作問がなされている。こうした力を適切に測る設問構成の実現に尽力されている問題作成関係者に敬意を表す。

4 今後の共通テストへの要望

報告書（本試験）の方に記載。

② 日本情報科教育学会

(代表者 森本 康彦 会員数 約350人)

TEL 049-266-4516

1 前文

共通テストでは、各教科・科目の特質に応じた学習過程を重視し、受験者が高等学校で身に付けた知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等を評価するものとされている。『情報Ⅰ』の問題作成方針として「社会や身近な生活の中の題材、及び受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事例や事象について、情報社会と人との関わりや情報の科学的な理解を基に考察する力を問う問題などとともに、問題の発見・解決に向けて考察する力を問う問題も含めて検討する」とされている。今回についても、分量や内容に昨年と大きく異なる部分はなく、ただ知識を問うのではなく、問題文から場面を読み解き、適切に思考・判断する過程を通じ問題解決を図るための力を問うものであった。これは、大学入試センターが事前に示していた作成方針どおりと言ってよいだろう。

本年度の受験者数は 577 人であった。『情報Ⅰ』は、共通必修科目として設定されている「情報Ⅰ」の4つの学習内容「情報社会の問題解決」「コミュニケーションと情報デザイン」「コンピュータとプログラミング」「情報通信ネットワークとデータの活用」に関する内容が出題範囲とされ、本科目では、問題の発見・解決を行う学習活動を通してこれらの内容について指導している。

以上のことを踏まえ、ここでは、次の観点から総合的に評価を行った。

- (1) 出題内容や範囲は偏ったものになっていないか。
- (2) 問題の構成（設問数、配点等）や難易度は適切か。
- (3) 問題の設問形式は適切であったか。また、文章の表現や用語、図表などは適切であったか。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

出題範囲は、本試験と比較して、四つの学習内容から大きく偏ることなく出題され、全体のバランスを考えた問題構成になっている。

第1問 第1問は、「情報Ⅰ」の広範な領域からバランスよく出題されている。日常的な題材を扱いつつ、単なる知識の暗記にとどまらず論理的思考力や実践的な判断力を問う内容となっており、形式・分量共に適切である。

問1 aは任意の時刻を24時間制で時と分でそれぞれ必要なビット数を割り当てる問題である。bは情報通信ネットワークの仕組みに関する問題であり、IPアドレス、LANの構成機器、TCPの機能、パケット交換方式の特徴といった基本的な知識を問う内容で、難易度はやや易しいと考えられる。

問2 ゲノム（塩基配列）の中に繰り返し出現するパターンを別記号に置き換えてデータ圧縮を行う問題である。短い文字列から段階的に長い文字列へ適用する構成である。置換後の再置換など集中力を要するが、指示された規則を丁寧に追えば解答でき、難易度は標準的と考えられる。

問3 会議の記録と情報デザインに関する問題である。aは定められたルールを適用し、文章を的確に階層構造にする能力を測る問題である。b、cでは、aで構造化された議事録を共有する際に、情報の受信者の立場から見て、分かりやすい伝達のための装飾をどう設定すべきかを問う問題である。難易度はやや易しいと思われる。

問4 アンケートの回答の蓄積を扱った問題である。aは10年前と今回で住所・年齢条件が異

なる点から個人情報保護を問う設問，bは二つの表を統合して分析する場合に必要な処理（実施年の追加など）を問う問題，cは企画を別表化し識別番号で関連付ける正規化の利点を問う内容である。識別番号で平均や標準偏差を計算することに意味がないことを，尺度の理解も含めて判断させる選択肢があり，データの収集・整理・分析に関する総合的判断を求める実践的な良問で，難易度は標準的と考えられる。

第2問 AとBのいずれも社会や身近な生活の中の事象を扱い，情報や情報技術がどのように活用されているのかを扱った問題である。常識で解答できるような易しい問題も見られるが，問題の発見や解決に向けた示唆に富む良い題材であると考えられる。

A SNSを利用する際の注意点を題材とし，投稿に際しての注意点や関連する法規，個人情報の特等について問う問題である。いずれも容易に正解を導けるため，出題方法の更なる工夫の余地があると思われるが，題材は適切である。

問1 SNSを利用する際の注意点に関する問題である。ほぼ毎日利用している高校生にとっては常識の範囲内の問題であるため，設問の更なる工夫が望まれる。

問2 SNSに投稿する写真について，関連する法規について問う問題である。単に法規の内容を暗記するだけでなく，知識を活用し，実際の写真から法規の内容を考える必要がある良問である。

問3 自分がSNSに投稿した情報を基に，自身に関する情報の特定につながる恐れについて考え，判断させる問題である。出題内容や方法は適切であるが，常にSNSを活用している受験者にとっては容易に解答できる問題であるため，設問の更なる工夫が望まれる。

問4 SNSに投稿された写真に関連し，情報技術の高度な発達によって可能となった内容についてその仕組みを問う内容である。容易に判断できるため，選択肢の内容に更なる工夫が望まれる。

問5 見知らぬアカウントから直接メッセージが届いた際の対応について問う問題である。容易に判断でき，解答できる内容であるため，設問に更なる工夫が望まれる。

問6 情報セキュリティと法に関連する前者3択，後2択の正しい組合せを考え，判断する問題である。後2択は常識で判断できる容易な問題であり，前者3択も容易に判断できるため，選択肢の内容に更なる工夫が望まれる。

B 動画の撮影とフレームレートやデータ量について問う問題である。身近な題材を基にその仕組みや影響を考え，判断することが求められ，単なる知識の再生だけでなく，それを活用して正答を導く必要がある標準的な難易度の良問である。

問1 フレームレートを変えた場合の動画の時間的な影響などについて考え，判断する問題である。フレームレートの正確な理解を基に体験的に考え，判断する必要がある標準的な難易度の良問である。

問2 一定の条件における動画のデータ量を求める問題である。容易に正答できる問題ではあるが，最終的な計算結果を求めるのではなく，途中の立式部分の数値を問うことで，情報科として問いたい内容を問うている良い設問である。

問3 動画の各フレーム間で異なる場所の情報記録してデータ量を減らす方法について考え，判断する問題である。単純ではあるが，単なる知識だけでなく，具体的な画像における判断が要求される，適切であり標準的な難易度の問題である。

問4 データを減らす複数の動画変換方式において，変換後のデータ量の大小を比較する問題である。知識を活用し，それぞれの変換方式でのデータ量の変化を正確に理解する必要がある良問である。

問5 サンプル周波数とフレームレートとの関係を考え判断する問題である。それぞれの単位の仕組みや意味を理解できていれば正答できる適切で標準的な問題ではあるが、あいまいな理解の受験者にとってはやや難しかったと思われる。

問6 動画に関する複数の説明について、それぞれの正誤を総合的に判断する問題である。三つのうち二つの説明は容易に判断できると考えられ、残り一つの文中にある用語の説明が正しく理解できているかが実際に問われることになった問題であったと思われるため、更なる選択肢の工夫が望まれる。

第3問 文化祭のクイズ大会におけるクイズ集を題材にした問題である。比較演算子、関数、論理演算子の意味が本文で与えられており、共通テスト用のプログラム表記に不慣れな受験者でも読み解けるよう配慮された表現・形式である。全体として表現・形式共に適切である。

問1 最大数を2、次に3と置いた場合について、番号0から順に手作業で追跡させる。採用表と分野別の採用問題数表の更新を通じて、「上限に達すると採用しない」という条件分岐の意味を具体的に理解させる導入である。最大数の違いで採用結果が変わることも同時に確認でき、後の設問で扱うパラメータ `saidai` の役割が明確になる。作業量は限定されており、段階的な理解に適した分量である。

問2 分野名を0から5の番号に対応付け、問題番号を添字とする配列 `Bunya` でデータを表す。採用済みかどうかを配列 `Saiyou` で管理し、分野別採用数を配列 `Mondaisu` で数えるという、基本だが重要な設計を問うている。空欄補充により、条件が成立したときだけ `Saiyou` と `Mondaisu` が更新されることを追跡させる点は、プログラム読解の力を測る上で効果的である。特定添字への代入回数を問う設問も、分岐と更新の関係を丁寧に確認させるねらいが明確である。

問3 プログラムを拡張し、問題が重複しない四つのクイズ集（1から4番）を作る。クイズ集ごとに `Mondaisu` を初期化しつつ、`Saiyou[i]==0` の問題だけを採用対象にすることで、重複排除と分野上限という二つの制約を同時に満たす構造になっている。採用時に `Saiyou[i]` へクイズ集番号 `c` を記録し、最後に `Saiyou[i]>0` のものを表示する流れは、状態を「0/非0」から「どの集か」へ拡張しており、同じ配列で情報量を増やす工夫がある。多重ループと複合条件 (and/or) の統合により難度は上がるが、変数や配列の役割が文章で丁寧に説明されているため、「情報 I」の範囲でプログラミングによる問題解決を評価する設問として、分量・程度はおおむね適切である。

第4問 スギ花粉の飛散花粉数のオープンデータを探究的に分析する問題である。東京都が観測した12地点について過去20年分の1月から5月の飛散花粉数を比較し、天候データと組み合わせ分析を進めていく流れで設問が設けられている。花粉症で困っている人が多いことから、天候データを基にした予測を、対策に役立っている人も多いだろう。ニュースなどで伝えられている内容を、データを基に検証する姿勢は必要となることから、本問題のように探究的に取り組んでいく問題は、入試としての出題だけでなく、授業への活用も期待したい。

問1 12地点について、地点ごとに20年分の分布を箱ひげ図とした図から読み取る設問である。アはMさんが住むA地点の傾向の読み取りとなっていた。箱ひげ図が表す基本的な統計量を読み取る設問で、解答群に示された文を一つずつ確認すれば解答できる、基本的な内容であった。イとウは基本的な統計量が示されている表から、12地点を示すグラフを選ぶ設問であった。グラフの高さ不足に加え、縦軸の飛散花粉数が2500間隔で読み取りにくく、解答を難しくした可能性がある。特に、G地点とJ地点は傾向が似ており、相違点を目盛りと対応付けて把握できたかが難易度を高めたと考えられる。また、地点名A～Lと登場

人物名を連続するアルファベットで示した点も紛らわしく、明確に区別できる表現が好ましいと考える。

問2 **工**は飛散花粉数と前年の月ごとの天候データとの相関係数が示され、数値から読み取れる傾向を読み取る設問である。正誤を問われた文のうち、一つは相関係数を求めるために用いたデータが何であるかを問う文、二つは相関係数の正負についての理解を問う文となっていた。すべて正答した場合に得点となる解答方法であったが、標準的な難易度と考える。

問3 前問で特に相関係数の値が大きかった6月と7月の日射量について、移動平均を求める問題である。**オ**は、前後の幅が異なる日数としたときの移動平均を折れ線グラフにしたものが四つ示され、その中から一つを選択する設問となっていた。リード文で移動平均の説明が十分になされており、設問として適切であったと考えられる。幅が±1日、±2日、±4日、±15日の中から±5日に対応するものを選ばせる点でも、十分に区別できる設問であったと考えられる。**カ**と**キ**は移動平均を求めるために対象とした日数を問う設問となっていた。設問中に「その日を含む」と書いていることから、落ち着いて解答していれば正答できる設問であった。

問4 移動平均の対象となる幅ごとに、移動平均の中心となる日を変化させながら飛散花粉数との相関係数を求めて示された折れ線グラフを読み取る問題である。**ク**は折れ線グラフから縦軸の「相関係数」が最大になる日付(横軸)を読み取る設問であった。**ケ**は、**ク**のときを取るグラフが3本の折れ線グラフのうち、どれかを問う設問であった。**コ**は、折れ線グラフごとに最大値を取る移動平均の中心となる日付を調べ、前後の幅を考えて対象期間を比較する設問であった。相関係数の最大値が前後との差が分かりにくいいため読み取りにくさがあったと思われる。**ク**、**ケ**、**コ**のいずれも、折れ線グラフから何を読み取ればよいのかを理解する点で、難易度が高かったのではないかと考える。高等学校段階では相互相関係数自体は扱わないが、本設問はその理解を直接問うものではなく、示された折れ線グラフから指示されたものを読み取ることで解答できるため、出題内容、範囲として適切と考えられる。

問5 前問の結果から最も相関が高い場合の数値を用いて、単回帰分析による予測を行う問題である。**サ**は回帰直線の方程式を用いて概数を求める設問、**シ**は散布図中の2点について予測値と比較する設問であった。回帰直線の方程式を理解していれば標準的な設問であり、数値は「おおよそ」で良いと気付けば計算時間も抑えられたと考えられる。

3 総評・まとめ

本試験と比べ、やや難易度が低い問題が多く見られたが、全体としては、適切な分量・程度だったと判断される。前文で述べたとおり、ただ知識を問うだけでなく、問題文から場面を読み解き、必要な知識を活用し、適切に思考・判断して問題解決を図るための力を問う問題が多数見られた。

第1問の問1は知識問題だが、aはビット列での表現、bは情報通信ネットワークの構成理解を測るもので、単なる暗記ではなく、知識を活用・転用する際の関連性の理解が求められる。問3は情報デザインに関する設問で、ルールに基づく表現(a)、適切な装飾(b)、更に分かりやすくする工夫(c)を段階的に問う構成となっており、情報デザインの力を測る出題例として参考になる良問である。問4はデータの収集・整理・分析に関する設問で、アンケートという身近な題材から正規化の利点へと導く流れは自然で、データの表現・蓄積の考え方を問う良問である。一方、容易に解ける問題も多く、設問や選択肢の工夫により全体の難易度をやや高める余地がある。

第2問Aは、SNS利用時の注意点を題材に、メディア特性や法規、情報セキュリティ、情報社会

の責任などを総合的に問う設問で、学習内容「情報社会の問題解決」として適切な良問である。一方、常識で解ける部分もあり、出題方法には工夫の余地がある。

第2問Bは、動画を題材に、フレームレートやファイルサイズ、圧縮、編集、音声の標本化など情報のデジタル化を総合的に問う設問である。各設問は正確な理解に基づく判断を要し、特に問2は単なる計算でなく求め方を問う点で、標準的な難易度の良問と言える。

第3問は、手作業で規則を導く、それを関数・配列・反復で実装する、更に改善・拡張するという流れでプログラミング力を問う構成である。規則の抽出や状態の保持・更新、シミュレーション結果に基づく判断を求める良問であり、添字や関数仕様などの前提も丁寧に示され、分量・程度とも適切であった。今後も用語・記号の一貫性と説明の明確さの維持が望まれる。

第4問は、10ページと本試験よりやや多いが余白が多く空欄も少ないため分量は適切である。一方、問1は見開き2ページに内容が集中し、図1のグラフが読み取りにくい点がある。難易度は標準よりやや高いが、移動平均や相互相関の知識を直接問わず平均の性質や折れ線グラフの読み取りに帰着させており、用いた値の理解は難しいものの「情報Ⅰ」として妥当な設問と考えられる。

4 今後の共通テストへの要望

報告書（本試験）の方に記載。